

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

<論文> 《祇園精舎》の展開

著者	正木 信一
雑誌名	日本文学誌要
巻	50
ページ	47-55
発行年	1994-07-09
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019763

《祇園精舎》の展開

正 木 信 一

一

祇園精舎の鐘が「諸行無常」と鳴り響くとき、それは臨終を迎えた病僧に、「雪山偈」と呼ばれるこの偈の結句「寂滅為楽」までを聞かせたはずである。病僧もこの最後の句を聞きおわたした時に、畏怖から解き放たれ、安心をえて滅に入ることができるのである。

本歌取や本説歌、あるいは散文中の引歌や引句も、短い語句からその本歌や本句の前後（時にはその全部）をそこに重ねあわせて読み取るのが常識であろう。

偈の起句の「諸行」と「無常」とは主語・述語の関係にあるが、これが主語節となり、承句「是正滅法」を密接不離の述部とする一つの複文をなしている。「諸行無常」という一句だけから、『平家』の享受者は少なくともこれにつづく「是生滅法」をも含めてうけるわけである。作者はこの複文とつぎの「娑羅雙樹の花の色、盛者心衰の理をあらはす」とによって一対の対句を構成する。

「盛者心衰」という語が、省略された「是正滅法」を代行するの

である。対句は、聴覚的事象と視覚的事象とを対置し、時間と空間とを歴史として統一するとともに、「法」あるいは「理」によって、世界と歴史を合法則的に認識しようとしていることを示す。そしてこれから「おごれる人」と「たけき者」との第二の対句を導きだし、さらに「異朝」と「本朝」の具体的な第三の対句で本題に入っていく。

まことに巧妙な構成なのだが、そもそも『平家』作者が冒頭に引用した「諸行無常」には、先にも述べたように、「是生滅法」が密着していた。それを、対句を重ねて平家興亡の歴史にむすびつけるために、作者は偈の後半、「生滅滅已、寂滅為楽」の二句（それこそ病僧に安心を与え、恐怖から救うことばであった）を飛び越えなければならなかった。「雪山偈」の中から、作者は「救い」を切り捨ててしまったのである。

「生（者）」が最終的に「（死）滅」に至るのは間違いないが「法（則）」である。しかしその生から死までの過程は、生まれた後瞬時も留まることなく、不断に変化してゆく。あらゆる存在・事象が決

して不変ではありえないことがすなわち「無常」なのである。言い換えれば、「諸行無常」というのは道德的価値観とは関わりなく、自然が変化し、人間（社会）の歴史が推移する事実への認識にはかならない。したがってそこには、衰滅に向かう消極的な退化もあるし、積極的な成長・発展もあり、新たな生成もある。しかも現実には、一方的・一面的に進むのではなく、それらが複雑に絡みあい、矛盾を含みながら、あるいはその矛盾をしばしば爆発させながら進行してゆく。

ところが『平家』序章は、今まで繰り返言われてきたように、世界の変化のうちの積極的な側面を見ようとしないうちに特徴がある。これは、『平家』作者がその冒頭で、とくに平家一門を中心とする歴史を、あえて意識的に、「救い」のない、いわば「諦め」の世界観によって衰亡・消滅の面からのみ見てゆこうとする姿勢である。偈の引用に即して言えば、後半の「生滅滅已、寂滅為楽」の転結二句を切り捨ててしまったところに、彼の世界観・歴史観が組み立てられていると言えよう。

二

作者は、「生滅の法」と「盛衰の理」が、つぎの「おごれる人」と「たけき者」との対句をとおして時空を超えた真理であると説いた上で、古今東西の歴史から八人の反逆者を列挙し、彼等が「久しからずして亡じ」た直接の原因は儒教道德に背反したからだという。しかしそれは道德的・主観的な価値判断による因果の法であって、「生」は「滅」の因、「滅」は「生」の果という、客観的な事実判断にもとづく因果論としての生滅の法とは異質のものである。作者は

この二つの「法」を一つに結びつけて混合し、同時に彼の保守的な歴史観と価値観をのぞかせている。ここにあげられた八人の先蹤がすべて「悪逆」の徒であつたために、彼等の滅亡は道德的な因果の法からも科学的な生滅の法からも説明が可能であつた¹⁾。

では善人の場合はどうか。やはり「諸行無常、是正滅法」、死からのがれることは不可能でも、道德的な因果の法とともに、仏法もまたこの世で善因を積んだものには善果が約束されることを教えている。つまり彼等には死後の「救い」が期待できるはずである。

ところが『平家』冒頭の無常観には「救い」がなかった。それは、悪人を中心として歴史を見てゆこうとしているからではないか。

さて、『平家』の序が「おごれる人」「たけき者」の系譜の延長線上に清盛を位置づけていること、したがって清盛も「久しからずして亡じ」る運命をせおって登場している点もしばしば言われているとおりである。

彼が熱病に苦しみながら「あっち死」したのは、まさに「悪行の報い」で、「救い」のない死であらう。

しかし、彼の死は、諸行無常・盛者必衰ないし因果応報の理法から逸脱してはいないけれども、現存『平家物語』では、そこに付け加えられる生前の逸話が、あるいは経の島を築いて多くの人命を救ったり、あるいは慈慧僧正の再誕であつたり、はては白河院の落胤とまでなつて、彼が凡庸な常人でないことを語る。これは序章の「救い」のない無常観とはいささか色合いを異にする。とくに《築島》は、すぐれた善行で、彼の他の悪行に対するマイナス評価をいくらかでも軽減し、緩和する方向に作用しているように思われるのである。

もともと、この逸話群は渥美かをるによれば、原平家には勿論無かった筈で「これがかなりのスペースをしめるので、原平家の清盛像を隠蔽することになった」（『平家物語の基礎的研究』）と言う。

また、現『平家』の前に『治承物語』六巻があったことが明らかにされているが、それは『保元物語』『平家物語』あるいは『承久記』と同じく年号を冠した書名で、おそらく治承年間の歴史を素材とし、この年号の最後の年の清盛の死をもって終わっていたのではなからうか。とすると、原『平家』の序章は清盛の死を念頭に置いて書かれ、雪山偈の後半を切り捨てたその世界観にひとまず相応する結末をもっていたものと考えられる。

原平家あるいは『治承物語』が清盛の死で終わっていたかどうか、これ以上の憶測は慎もう。現存のテキストが『祇園精舎』の世界観をどのように展開し、結んでいるか、さらによく言われるように、『平家』序章の無常観は『平家』全巻を貫いているかなどを、本文をとおして考えてみたい。だいぶ回り道をしたが、これが実は本稿の趣意である。

三

『祇園精舎』では、世界がすべて先細りになってゆき、ついには滅亡するという歴史観を「法則」としてうちだしたが、つづく『殿上闇討』の忠盛は、貴族たちの狭量・陰險な策謀を失敗させ、「還而叡感にあづか」って、一門栄達の基礎を確定した。作者は、貴族の支配する政界を侵蝕してゆく新興武士忠盛には惜しめない拍手を送り、逆に腹黒い貴族たちの卑劣さには終始批判的である。そこには沈鬱な『祇園精舎』とはかなり隔たった一歴史の積極面を肯定的

に見ようとする一眼がはたらいている。

『殿上闇討』で武人忠盛を描いた作者は、次章『鱧』の前半では忠盛の歌人としての一面をとりあげた。熟成した貴族文化的「ざえ」の持ち主であることを強調すれば、貴族文化志向の作者の価値観に照らしてみると、それも大きなプラス評価となる。

彼の死後家督を継いだ清盛が急速に出世した過程は、ほとんどメモのような簡略さで語られる。

この急速な一門の栄達の原因を「熊野権現の御利生」と説明するのが後半であるが、これは覚一本が初出らしい。清盛が故実の知識を披瀝したり、一門の繁栄が「九代の先蹤をこえ給ふこそめでたけれ」と祝福するこの部分は、『平家』十二巻中には見られない筆遣いで、本来『平家』とは関わりのない説話である。そこでこの後半部を欠く諸本（それが本来の形である）では、つづく『禿』でいきなり一門の傍若無人、「おごれる」倨敖が顕著になってくる。それは次章『我身栄花』に直結して、やがて衰亡に向かう前提条件となるのである。「栄花」が衰滅への入り口となるという骨組は、『平家』を一貫する歴史把握の論理として注目ししよう。

四

清盛が、「一天四海をたなごころのうちになぎり」「不思議の事をのみし」たその具体的な最初の話が『祇王』である。それは『平家物語』の縮図だとよく言われる。が、「四人のあまども」は「皆往生の素懐をとげ」、最後は「救い」で終わっている。生成の場所も伝承の経路も『平家』とは別なところにある『祇王』が、序章の世界観との間にずれを見せるのも当然であろう。

五

平家全盛の中で鹿谷事件が発覚する。その主謀者成親、荷担者西光・俊寛らの末路は改めて言うまでもあるまい。彼らの「救い」のない死は序章の理論（道徳的因果論をも含めて）そのままのコースである。

しかし成親の子成経は、ゆるされて鬼界が島から帰洛の途次、父の配所に立ちより、墓を訪ねて、同行の康頼とともに、丁重に父の後生菩提を祈った。そこで作者は「亡魂尊霊もいかにうれしとおぼしけん」と言う。俊寛も有王に最期を看取られ、「偏に弥陀の名号を唱へて、臨終正念をいのりつつ、息を引き取った。俊寛の娘は「十二の年尼になり、奈良の法華寺に勤すまして、父母の後世を訪」い、有王は俊寛の遺骨を高野に納め、「諸国七道修行して、主の後世を訪」った。これらは、成親と俊寛にとって、死後の「救い」になったのだろうか。『平家』は《僧都死去》の終わりに、「か様に人の思歎きのつもりぬる、平家の末こそおそろしけれ」と記して「鹿の谷事件」の結びとしている。この二人の「平家の末」を脅かす怨念は消えなかったらしい。本人の念仏も遺族の孝養も、必ずしも「救い」にはならなかったようである。

第二の平家打倒のクーデターは、頼政・以仁王事件である。これも熊野の別当湛増の密告によって清盛の知るところとなり、頼政らは宇治で戦死した。彼としては無念の死であつたろう。辞世の歌がそれを示している。彼に「救い」はなかった。が、作者はこの反平家の企てを「よしなき謀反」と言いながら、鹿の谷の成親らの時とは違って、頼政にかなり同情的である。彼は一生官位の昇進に執着

した人物であつた。治承二年十二月二十四日の除目で彼は清盛の推挽によって三位に叙せられた（『玉葉』）が、『平家』は頼政は歌によって昇進したとして、あえてこれに触れていないから、清盛は一族以外の栄達を考えていなかったことになり、頼政は忘恩の汚名を被らずにおわつた。頼政が、武人であると同時に、当時有数の歌人でもあつたことが、『平家』作者の同情を買つたものと思われる。これは頼政にとって、序章の世界観とは違った世界観ないし価値観からの「救い」になってはいないだろうか。ちなみに清盛は、このクーデターを、すくなくともその初期には以仁王の企てと理解していたこともあつて、特に頼政に対しては腹を立てていない。

六

順序としては、頼政の前に重盛の死があるが、作者の観念の産物にすぎない重盛像はここでは省筆しよう。

重盛というブレーキの死後、清盛の悪行はエスカレートし、ついに後白河法皇を幽閉するに至つた。清盛をなだめるために派遣された静賢法印に、清盛は、「且は腹立し、且は落涙し」つつ、平家とくに重盛に対する忘恩・違約・清盛の要請をあえて覆した人事、さては鹿谷陰謀への関与などなど、法皇の非人間的な仕打を、情理を尽くして論難する。さすがの静賢もともに反論できず、論点を外して法皇を弁護するはかはなかった……。そして法皇幽閉はついに決行され、同時に摂政はじめ公卿四十三人を罷免・更迭した。それらは常識的には、清盛の大きな悪行の一つとなる。その後南都・三井寺の焼打ち、《都遷》など、彼の悪行は更に累積される。

そのうちに、先の以仁王の令旨を受けた頼朝・義仲ら諸国の源氏

が蜂起し、その他の地方武士の間にも反平家ののろしが広がりはじめるという情勢の中で、彼にも死期が来た。

彼の死については先にも一言触れたが、ここでもう一度その意味を見ておかなければならない。彼は焦熱地獄の真っ只中で、無間地獄の獄卒に迎えられ、死を目前にしながら、「今生の望一事ものこる処なし」といいきって、自分の一生に満足している。この死は「救い」のない死だと簡単に割りきれらるだろうか。

ただし思ひをく事としては……頼朝が頸を見ざりつるこそやすからね。われいかにもなりなん後は、堂塔をもたて、孝養をもすべからず、やがて打手をつかはし、頼朝が首をはねて、わがはかのまへに懸くべし。それぞ孝養にてあらんずる。

仏教に反逆するかのようなこの遺言を作者は「罪ふかけれ」という。

霊仏・霊社に金銀七宝をなげ、……いのられけれども、そのしるしもなかけり。……大法・秘法の効験もなく、神明三宝の威光も消え、諸天も擁護したまはず。

加持・祈禱や神仏の擁護などあてにしていない『平家』の清盛には当然のことである。彼は、成親・俊寛も、法皇も、そしてこの頼朝も、その平家に対する忘恩を許すことできなかった。神仏への反逆ともとれる彼の言葉は、法皇や摂関家をはじめとする旧権力の支柱となりきってしまった古代仏教の、その非人間性に対する人間清盛の闘いを意味するものであった。

《祇園精舎》で、「清盛公と申し人のありさま、伝うけ給はるこそ、心も詞も及ばれね」と紹介された時の彼の巨大な姿が、この死の場面にもあらわれている。世俗的な常識ではとらえきれない巨人

の死は、その世俗にまみれた常識としての「諸行無常」や「盛者必衰」の觀念の中に包みこむことはできない。彼の死は、したがって彼の一生は、そのような世俗的常識に裏打ちされた「諸行無常」「盛者必衰」という言葉で組み立てられている世界觀の變革を迫ることになる。

いままで、「救い」のない世界觀という言い方をしてきたが、いったい何が「救い」なのかも、改めて考えなおす必要がある。

七

合戦は修羅の世界である。もとより宗教的な「救い」は期待できない。合戦に至らなかった《富士川》を除くと、合戦らしい源平の合戦は、北陸の戦いから始まる。その何万という戦死者の中に、白髪を黒く染め、錦の直垂を着て討ち死にした実盛がいる。彼の死は、「諸行無常」や「盛者必衰」とは違ったある種の感動を、『平家』の聴き手や読者に与えてきた。

木曾が都に迫って来て、平家の都落ちとなる。この時一門から離れて、その後の合戦に加わらなかった人物がいる。清盛の弟池大納言頼盛と郎等の肥後守貞能である。貞能は重盛の骨を高野に納め、東国の宇都宮に身を寄せた。彼はその後『平家』に登場しない。頼盛は、母池禪尼が平治の乱に頼朝を助けた縁故を頼って、都へ引き返したが、戦後頼朝から厚遇された。彼等が救われたとするなら、その「救い」は、世俗的・常識的な「救い」であろう。

都を落ちてゆく人々の中で、維盛と忠度については、かつて論じたことがあるが、簡単に触れておきたい。

屋代本の維盛は北の方に次のように言う、

1 維盛ハ一門ノ人々ニツレテ西国ノ方ヘ落行ナリ。

2 具シ進セントハ思ヘトモ、道ニモ敵待ナレハ、平ニ通ラン事モ可難。

3 若何クノ浦ニモ心安ク落付タラハ、其ヨリシテ迎二人ヲ奉ン。

4 又何ナル人ニモ見ヘ給ヘカシ。

5 奉懸情人都ノ内ニモナトカハ無ルヘキ。

最愛の北の方を危険な目に遭わせたくない、辛い思いをさせたくない。だから都に残してゆく。安全な所に落ち着いたら迎えのものを差し向けよう（しかしそれはいつになるか分からない。そこで）自分以外の人と再婚してでも幸せになってほしいというのである。

4を竹柏園本は「亦討レタルト聞玉ハ、如何ナル人ニモ間見ヘ玉ヒ幼者共ヲモ過シ玉ヘカシ」、鎌倉本は「我為被討ト聞給ト云共様ナトカヘ給コトハ努々アルヘカ（ラ）ス何ナラン人ニモ見ヘテ稚ナキ者共ヲモ孚ミ給ヘシ」と、次第に不自然さをなくすくふうをしているが、それにしてもこれは前後に例のない愛情であろう。この再婚の勧めは非語り系に見えないから、語りの中で増補されたと思われる。彼は巻十で入水する間際まで、この「愛執」に悩み続けた。巻十で最後に滝口入道の説教によって「忽に妄念をひるがへ」すあつけなさよりも、悩む維盛のほうがはるかに人間的であり、そうした救われる見込みのない姿こそ、彼の名を後世に残すことになったのではなからうか。

忠度が深夜都落の途中から引返して、歌の師俊成に詠草を託した話はありませんが有名だが、非語り本の例えば四部合戦状本では、俊成は後難を恐れて忠度を門内にいれていない。義仲が今すぐにも

都に乱入して来るかもしれない状況は、俊成にとっても忠度にとっても危険である。忠度は門外で言うだけのことを言って、自選の歌百首を記した一卷を内へ投げ入れて去っていく。

それが語り本になると、俊成は「落人帰登タリト」「騒動ス」る人々を静め、「其人ナラハ苦カルマシ」（屋代本）と忠度を邸内に迎へ入れる。

深夜とはいえ、主従わずか七騎で都へ取って返したのは、忠度の非常識な冒険である。また源氏の武士たちによる「狼籍」は、彼等の入京以前から京に伝えられている（『玉葉』・『山槐記』等）から、これを恐れて、俊成は愛弟子を入れなかったのが事実にかがいない。語り本は、歌道のために身の危険を顧みない俊成につくりかえた。

こうして師弟対面場が虚構され、古代の歌物語とはちがった感動を享受者に与えることとなったのである。維盛や忠度には序章が諦めた「救い」とは別な「救い」が用意されていないだろうか。

八

平家が都落ちして、西海・南海を漂泊している間に、一時都に君臨した木曾は、まもなく鎌倉軍との戦いで悲壮な最期を遂げる。木曾は野蕃であった、無教養であった、非「常識」であった。それでも《木曾最期》は多くの人々に、物語文学には見られない衝撃を与えつづけてきた。

今まで、『平家』序章について、「雪山偈の後半を切り捨てた」「救いのない世界観」と繰り返した。また、合戦について「救い」を期待できないものと言った。その「救い」は、より正確には、「仏教（あるいは宗教）による「救い」と言うべきであった。

「救いのない世界観」も、「救い」を諦めた世界観」と言うべきであった。そして、悪行を重ねた清盛の死、合戦で討死した頼政・実盛・義仲について、あるいは維盛・忠度について、ある種の「感動」または「衝撃」を与えるといったのは、彼等の人間としての生と死が、聴者・読者の「人間」を揺り動かすものを持っていることだったのである。それは、宗教的な救いでも、道徳的な賞賛でもなく、それらとは全く範疇を異にする、しかしやはり「救い」なのではないだろうか。

一の谷に移ろう。

忠度はその最期もよく知られているが、それは彼の豪勇な戦い方、十念をとえ、観無量寿経の言葉を口にしながら討たれたこと、えびらに結びつけた歌一首、の三点からなっている。勇戦敢闘した人物はほかにもいるが、合戦の中で念仏して討たれたのは彼だけではないだろうか。しかし彼をもっとも印象付けるのは、辞世の歌によって、武人であると同時に歌人として生き・死んでいったところにある。寿永三年二月はじめ、「旅宿花」と題するこの歌は、彼が戦陣の中でも歌詠に励んでいたことを物語る。武勇の点だけでも戦史に記録されたかもしれない。十念が宗教的な救いになったかもしれない。しかしそれ以上に、彼の名を不朽ならしめたのは、彼の「都落」と響きあうこの辞世の歌一首であった。「薩摩守殿をば、岡辺の六野太が討ちたてまたるぞや」と名のりければ、敵もみかたも是を聞いて「あないとをし、武芸にも歌道にも達者にておはしつる人を。あたらず大將軍を」とて、涙を流し、袖をぬらさぬはなかりけり」と琵琶法師が語り納めた時、聴衆の中に起こった吐息と一瞬の沈黙は、やはり「ある種の感動」「ある種の救い」を意味するもの

であろう。

《敦盛最期》も、作者は「熊谷が発心」を促した「讃佛乗の因」として、しいて仏教にむすびつける。しかしこの少年武将が、熊谷に呼ばれた時、にげることもできたのに引き返したこと、組み敷かれても最後まで名乗らなかったこと、腰に笛を差していたことなど、佛教とは関係のない諸点に話のポイントがある。ここでも作者は宗教とは違う「救い（感動）」を創造している。

《知章最期》は父知盛を生き延びさせるための討死である。それもさることながら、船に逃げ帰った知盛が宗盛に深い自己省察を述べるところも見落とせない。この時、自分自身にメスを入れて、内面の深部を凝視した知盛の自己変革があったと思われる。都落の時、都に踏み止まることを主張した彼には、恐らくその先の見通しはなかったろう。が、壇浦では、阿波民部の裏切りを事前に見抜いている。女房たちに冗談を言う彼の爽やかな哄笑は、最後に残した言葉、「見るべき程のことは見つ」とともに、入水のあとまで人々の耳に残る。これもまた彼にとっても享受者にとっても「救い」である。

九

小宰相や重衡について、屋島軍や壇浦合戦について、とりあげなければならぬ問題は多いが、紙数も少なくなった今は、すべてまたの機会に譲って先に進みたい。

現存『平家物語』でふつうに言う「救い」のない結末といえ、当然「それよりしてこそ平家の子孫は永く絶えにけれ」の《六代被斬》で終わる十二巻本こそそれに当たるとしなければならぬ。平家の生き残りというより、平家嫡々の六代は、この時平家を代表す

る第一の人物であった。「十二の歳より、卅にあまるまで」生き永らえた陰には、文覚の奔走もあった、彼の出家もあった。『平家』は「ひとへに長谷の観音の御利生」と言う。いずれにしても、それらの救いは二十年で尽きた。それは、清盛の死で終わるよりももっと深いところで、『祇園精舎』の「諦め」の世界観にいつそうびつたり呼応する結末といえよう。それでは清盛の死以来、もろもろの生と死が織りなした「感動」、宗教とは違った「救い」は何だったのだろうか。

ここで改めて、『平家』序章が切り捨てた雪山偈の後半を見直してみよう。

「生滅滅已、寂滅為楽」。「生」はかならず「滅(死)」に至る。「生」があるから「滅」がある。「生」は因、「滅」は果である。「滅」は「生」を否定する。「生」(因)がなくなれば「滅」(果)もなくなる。こうして「生滅」がともに「滅已」すれば、「寂滅為楽」の世界が開ける。「生滅」にとらわれているかぎり、到達できない、宗教的な「救い」の世界である。

建礼門院は、壇浦で安徳天皇のあとを追って入水したが、源氏の武士にすくいあげられた。「愛別離苦」である。その後の建礼門院にとっては、「生病老死」の四苦のうち生きることが苦であった。建礼門院が十二巻の中で、六代が切られる前に語られていた間は、一門の代表者は六代で、彼女は高貴の身ではあっても平家の中の一人の女性にすぎなかった。しかし、巻十二の中から建礼門院の記事を抽出し、『灌頂巻』を特立した時から、彼女が一門の代表者として、象徴的存在となった。

壇浦の後、洛外吉田の一坊に身を寄せた建礼門院は、文治元年五

月落飾した。戒師に対する布施として、彼女は安徳天皇が入水直前まで着ていた直衣を師の前に捧げた。それは死んでも手放したくない、愛児の唯一の形見である。しかし自分がもっているのと戒師への布施とすると、どっちが亡児の菩提のためになるか。ひたすらわが子の後生善処を願う彼女は後者を選んだ。

やがて、より静謐の地を求めて大原寂光院に移る。ここにはじめてついた時、女院はまず本尊に向かって「先帝聖靈成等正覚、一門亡魂頓証菩提」(竹柏園本・鎌倉本等)と祈った。覚一本には「一門亡魂」の四字がない。覚一本の女院の胸中はわが子のことだけで一杯で、一門まで思い及ばなかったという次第である。

『大原御幸』で、仏に供える花を摘みに行った女院は、山から下りてくる途中で、法皇の姿に気付く。「怨憎会苦」である。この時、屋代本では、①「聖衆来迎ヲコソ待ツルニ……法皇ノ御幸成タル口惜サヨ」②此ノ有様ニテ見ヘ進ン事心憂ク悲クテ」と心情を奔出させる。後出本の多くは①を削り②の「心憂ク悲クテ」を「恥しさよ」に変えて、彼女の「怨憎」を和らげている。

やがてかえっていく法皇を見送った後、本尊に向かって彼女は祈る、「先帝聖成等正覚、一門亡魂頓証菩提」……。この祈りの場面は竹柏園本・鎌倉本・覚一本(以下一方系諸本)にはあるが、屋代本・百二十句本・八坂系諸本にはない。前三本では、彼女は寂光院についた時にも同じ祈りを本尊に捧げた。ただし覚一本ではその時、既述したように、「一門亡魂」の一句を欠いていた。竹・鎌両本は同語反復に過ぎないが、覚一本はその間に、安徳天皇だけでなく、一門全体が彼女の視野に入ってきたという変化を示している。彼女の祈りはここへ来てからこの日まで、毎日少なくとも六時勤行

のたびごとに繰り返されたにちがいない。この間に「一門亡魂」の一句が挿入されたことはなかったか、『平家』に徴するかぎり、それはわからない。しかし次のことだけは言える。

彼女は法皇に、今生で「六道」を体験したと語った。それは、六代斬られの前、十二巻のうちに置かれていた時には、彼女の一生の総括であった。が、灌頂巻つまり六代斬られの後に移されると、彼女を含む一門の総括という性格を帯びてくる。

わが子の後世を祈ることだけを、彼女は残された生の支えとしてきた。死を避けていたのではない。むしろ死は、愛児のいる処へいくことである。しかしそれはわが子と彼女自身の「生滅」へのこだわりであった。わが子の死がこの総括によって一門の死の中に位置付けられた時、彼女のこだわりは変質した。彼女の自己変革である。それは「生滅滅已」に、したがって「寂滅為楽」の世界に近づいたことにほかならない。

やがて建礼門院は「中尊の御手の五色の糸をひかへつゝ」念仏を唱えて息を引き取り、最後まで女院に仕えていた女房たちも、往生の素懷を遂げて、全巻の結びとなる。まぎれもなくすべてが救われている。序章が切り捨てた「偈」の後半は、灌頂巻で改めてとりあげられ、展開されたと言えよう。灌頂巻は、序章が期待していなかったという宗教的な結末を与えた。それは救われぬままに放っておけない享受者たちの要求だったにちがいない。しかし灌頂巻が創造的に付け加えたものは、宗教的な意味だけだったのか。³⁾

《大原御幸》の建礼門院像が諸本の間で揺れを見せていることは、見てきたとおりであるが、そこには鎌倉と京都との拮抗関係の微妙な反映があらうし、灌頂巻特立はその一応の決着を示してもいよう。

さらに南北朝から室町期にかけての歴史の蕩揺の中で、『平家』は、灌頂巻があるにしろないうしろ、また作者が意識していたかどうかに関わりなく、始めと終わりを結ぶ宗教の線からはみだしたところに、もっと別な、より新しい「救い」を準備しつつあったのではないだろうか。(九四・四・二七)

注1) 拙稿「祇園精舎おぼえ書き」(『日本文学』2014、七一年71年4月)

2) 『平家物語論考』巻七総論(九二年三月)

3) 『平家物語論考』灌頂巻総論(未刊)

あとがき

平家物語序章の思想は物語の全体を貫いている——という言説を何度か耳にも目にもした記憶があり、それは永い間私がひっかかっていた問題だった。もう解決ずみのことかもしれない、と思いがら、編集者から寄稿を勧められたのを機会に、病院のベッドで何の資料もなしにあらためて考えてみた。退院して引用箇所を補正しただけで投函してから、定年以來ここ数年入院と雑用で学会にごぶさたしている間に多くの卓説が公にされていたのを知って、私が完全に浦島太郎になってしまったことに気づいた。しかしもうまに合わない。不勉強と嗤われるのを覚悟の上で、ひとまず老醜をさらすこととする。既に貴重な成果を発表しておられる方々に、おわびとお礼を申しあげたい。くれぐれも、これが法政日文科のレベルなどと判断されないことを祈念しつつ。(六・二二)

(まさき しんいち・元文学部講師)